



千葉話し方友の会 会報

第42号

令和4年2月3日

発行 千葉話し方友の会

責任者 天野和子

感謝の言葉から

副会長 阿部良二



昨年二月、撮影の仕事である幼稚園に行った時のことです。げた箱の上においてある小さなブロンズ像や円形の講堂が柔らかな空気を生み出していました。その講堂には園の目標が掲げられ、その中の「ありがとがいえる子」といった目標が目にとまりました。わかりやすかったからです。

放課後体育の撮影が終わった時です。多くの子が外で待っている母親の元へ戻っていきます。すると、ヒアシンスの水栽培をかかえた女の子がトコトコとやってきて、「カメラマンさん、今日はありがとう」と言ってくれたのです。私は予期していなかったその言葉にずいぶん律儀な子だなあと思いました。「ヒアシンス、帰って帰るんだね」とだけ言葉を返しましたが、まもなく気づきました。「そんなんじゃない。この子は『ありがとがいえる子』という目標を実行しているんだ。園の目標はこの子に根付いているんだ」

感謝の言葉をもらい自分の気持ちもなごみましたが、それだけはありません。目標をひたすら実行しようとする健気な姿

に気づいた瞬間、私には次のような思いがはつきりと生まれたのです。「この子はどんな人に育つのだろうか。この子の母親はどんな人だろうか。どんな家庭の中で育てられているのだろうか。そしてどんな家庭をもつ人になるのだろうか。できるならばこれからの成長を見届けてみたい」

感謝を言葉で表現することが、もしその言葉がなかった場合とは明らかに違う世界をつくりだします。それは静かな池に石を投げてできる波紋のようです。次々に生まれて静かに広がっていきます。「ありがとがいえる子」という目標は感謝を言葉で表現することが作り出す思いのつながり、思いのひろがり、思い及んでいるのではないか。そしてこの目標を園の目標に設定した人はひよっとしたらこのことを初めから見通しているにちがいない」そう気づいた時、先人たちが雲の上で微笑んでいるように思えました。



コラム インドネシアでの体験

山下恒之

私は昭和六十三年から元号が変わった平成四年迄の四年間、インドネシアに出向しました。ジャワ島西部の田舎町のアニヨールに現地会社と合弁で化学工場を建設するプロジェクトでした。空港のあるジャカルタから、一部開通済みの高速を利用し車で二時間半ほどの場所です。宿舎は海岸沿いの古いリゾートホテルのコテージです。

ここで一番不便だったのが日本への電話です。「無事着いた、元気」と連絡するには、まず車で約四十分かけて、製鉄所が運営する電話局に向かいます。そこで用紙に番号などを記入して、日本への通話を申し込みます。二、三十分でやつとつながり話が出来ます。終わってしばらくすると料金が知らされ支払いを済ませます。これはほぼ半日の仕事です。日本と二時間の時差があり、家族が居るような時間を狙い、おれば問題ないのですが、不在だった場合は悲劇です。

赴任後半年過ぎた頃には会社社が通信設備、アンテナ等を設置して自動式の電話が開通し、やっと不便さから解放されました。また、帰国する平成四年には、車載型の大型移動電話機を目にするようになりました。

講演会報告

高橋修先生の

「クイズ形式で学ぶ 話し方上達法」



六月講演
コロナで
行事が中止
になる中、先
生の二年ぶ
りの講演会
でした。

クイズ形式でしたから、項目と内容に集中し勉強になりました。特に「言葉を目で届ける」アイコンタクトは、伝達効果が大きく習得するとよいということでした。その中で目線について、話の読点「。」のところは、視線を止めずに流して聴衆を見る。また、話の句点「。」では、視線を止め、「一、二」と数えるぐらいの早さで間をとるのが、基本ということでした。質問にでた、「早口になってしまふことへのアドバイス」では、「あえて、早口を直そうとするとは無い。ただし話の句点のところでは、『一、二』と数えるぐらいの間を取ればよい」との回答がありました。時間制約のある中で、有意義なお話を聞くことができました。（登坂静子）

実習報告

「会員がコメントする」



七月十五日の例会は「コメントは会員が行う」という初めての試みでの試みでした。進め方は、スピーチをした後、次の

人のコメントをするというリレー形式で繋ぐ方法。まん延防止措置中のために時間制約がありましたが、参加者十三名と少なく、スピーチ時間二分三十秒又は三分（予鈴はどちらも二分）、コメントは一分（予鈴五十秒）でできました。

一番のスピーチの方へのコメントは挨拶担当の阿部副会長。又、阿部副会長のスピーチを最後にしていただいたことで、会員全員がコメントにも参加できました。

講師の先生方にはコメントを省略としましたが、時間に余裕があり原先生に総評をしていただきました。

「コメントするのは、即題と同じ。一分という短い時間ながら、

皆さんがスピーチを聞いて共感し、上手にまとめていた」と、お褒めの言葉をいただきました。天野会長からも「初めての試みながら、進行が良かった。大成功」と。

司会（重宗さん）がスピーチとコメントの両方のタイム管理をするのは負担が大きいので、例会担当で分担し、四人のチームワークで乗り切ったと実感しました。（西村裕子）

コンクール代替行事

「お楽しみ会」



コロナ禍の中でコンクールを行うことが出来ず、それなら「千葉話し方友の会」の皆で何か楽しみたい。そんな思いから名前も「お楽しみ会」として計画をたてました。

スピーチと時間に変化を持たせ、テーマは「即題」、時間を、二分、三分、四分、五分、七分にして自分で選ぶという形です。

七分は長いという意見も出ましたが、何をしても良いという形を取り、ちようどの時間の人にはピタリ賞、少しずれた人には、ちよつとピタリ賞、ブービー賞もあり、表彰式までは時間を伏せての結果発表に盛り上げを試みましたが、参加者全員にも参加賞を添える事にしました。戸惑いもありましたが、日頃のスピーチ力が鍛えられており、難なくお楽しみ会としてのスピーチを終えることが出来ました。

ホテルでの昼食会では、ノンアルコール飲み放題、一分間スピーチを話し、久しぶりの交流に皆さんの笑顔が溢れました。（渡辺恵子）



コロナ禍の中で

・娘の結婚…挙式は自分と家族、披露宴は大切な人の為。コロナ禍なのに何故？そんな思いを払拭するご縁の有り難さを感じる式でした。

秋元美穂

・コロナ禍で世の中大騒ぎになっています。でも私の周りでコロナにかかったという情報は入っていません。早く終息を願うのみです。

足利恵政

・遠く聖武天皇がこのお経を唱えれば救われると全国に国分寺を建てた時も感染症が蔓延していたとか。歴史は繰り返すのだなあ。

阿部良二

・コロナで友人が亡くなりました。彼女から電話があったのに、返電するのを忘れた私に届いた娘さんからの伝言でした。ショックがまだ続いています。

天野和子

・私も含めて(物事出来てあたりまえ)という考え、とんでもない。何に対しても感謝の心を持つために、百年に一回位コロナはあつてよい。

植草重明

・私の住む住宅地は条例で家の境界は柵・生垣と決められている。自粛期間中は各家庭の庭に咲く花々、木々を眺めながら楽

しく散歩した。金子カヅ子

・コロナで外出が減った分、午前中はMLBの大谷が出場する試合をじっくり見る事ができました。大谷の大活躍でコロナのモヤモヤが吹き飛びました。

齊藤賢吉

・コロナのワクチン接種をする時、かかりつけの病院があった為電話で予約が取れて、スムーズに接種することが出来て良かったです。

齊藤弘子

・コロナ禍で一番寂しい事は、年二回帰っていた里帰りを去年今年と断念している事です。お墓参り、姉や友達が気になります。重宗光子

・「こんなことを考えた」仕事や私生活等多くの影響を受けました。そこで、思い立ったが吉日、行きたい所に行き、会いたい人に会い、一日一日を大事に生きたいです。

篠崎秀治

・政府は経済優先でコロナの正体や、海外の感染源は見逃されている。繰り返さないことが大切。日本国民も声を上げるべきだ。

清水孝行

・実は一昨年の暮、妻がコロナに罹り自分は絶対感染しないと

ていましたが、数日後熱が三八度を越え検査で陽性でした。注意しましょう。

高橋和義

・どこに捨てても花を咲かせ実をつける野菜たち、生きて種をつなぐことに必死だ。コロナ自粛生活で私の思いを合わせた光景の一つ。

田中慶征

・私はWHOのテドロス事務局長の対応が非常にまづかったと思います。武漢での発祥直後すぐ専門家を派遣し徹底究明すべきでした。

常世田憲治

・一月に右膝関節症と診断。九月手術。病院はコロナで静か。痛みの中読書三昧。入院生活は体に休憩をくれた。人生の転換点になった。

登坂静子

・海水浴の名所勝浦の浜では、住民のコロナ感染が心配で昨年も海開きはしませんでした。コロナ禍が早く終息するよう願っています。

富澤充以

・霧のせや無味朦朧の二年間 自粛生活の日々、趣味の映画、落語そして歌舞伎鑑賞ゼロの日が続く。

中村伊和男

・猛スピードの自転車。全身黒づくめ。深くかぶった帽子と大きな黒マスクにほとんど顔は見えず。一瞬、犯罪者かも？後ろ姿を追跡！

中村良子

・父が存命なら「戦争中と比べたら自粛なんかナンテコト無い」ときつと言う。姉のこの言葉に励ま

され、私は自粛を乗り切りました。

西村裕子

・多くの人が亡くなった。突然の不幸。これもその人の人生なのか。早く、普通の生活に戻ってほしい。

原 茂一

・銭湯に五日間通いました。感染しないか、心配していましたが、行ってみると大変人が少なく、安心しました。

見尾田和子

・目に見えないコロナ。何処か出会っていたのかも。かからなかったのは運が良かったから。コロナを舐めて過ごしたことを反省。

森 昭

・緊急事態宣言でプールが閉鎖となり、ウォーキングに切り替えました。その日の気分でもコースを決め、毎日15000歩程歩きまわりました。

山下恒之

・会社を退職したのとコロナ感染が拡大を始めた時期が重なりました。収集した書籍・雑誌の整理とDIYに多くの時間を使いました。

和田芳樹

・多くの余暇時間を利用して、本を読む事にしました。興味はあったが敢えて拒んできた作家の小説や、歴史物の長編小説です。

渡辺恵子



行事報告

「紅葉狩り」



日時 十二月五日(日)
場所 見浜園(海浜幕張公園内)
参加者 十六名
幹事 高橋、西村、齋藤賢、渡辺
二年ぶりの紅葉狩りは、日本庭園を堪能する紅葉狩りになった。緑の多い木々の中で紅葉はやや少なめ、それが反って赤や黄色を強調させていた。「寒椿」という菓子と抹茶を頂き、公園の日溜まりで弁当に舌鼓。もちろんスピーチも。解散後反省会に流れた人も有り。(登坂)



「忘年会」

日時 十二月十六日(木)
場所 魚鮮水産

参加者 十六名
幹事 常世田、中村、金子
待ちに待った久しぶりの宴会となりました。テーブルごとの話に盛り上がりましたが、一人一人のスピーチに耳を傾ける姿勢は、さすが友の会々員でした。食べて・飲んで・コロナも吹き飛ばすぐらいに笑いました。最後はいつもの一本締め、「ようー、パシッ」。幹事さんに感謝。(森)



「向井さん ありがとう」



向井さんの飄々とした持ち味がだんだんと枯れ味を増し、友の会に色取りを添えてもらえました。終戦間際の悲惨な思い出は忘れられません。また、山倉さんとお二人が友の会に与えた滋味のある関係にも感謝しています。長い間、ご協力ありがとうございました。(原)

運営委員会 報告

(特記事項のみ)

〈六月二十四日(木)〉

- ・会費納入者二十四名(半年納入一名)
- ・会場の使用短縮対策…発表二分三十秒、講師コメント二人で三分。
- ・お月見、一泊研修中止。
- ・コンクール代替イベント開

掲示板

- ・催、実行委員会に一任。会則見直し…次期総会へ。
- ・〈十月二十八日(木)〉
- ・ホームページの更新の検討。
- ・コンクール代替イベントの提案検討。(文責:登坂)

- (新型コロナの為変更あり)
- ★雪の為、一月七日例会中止
- ★運営委員会…一月二十九日
- ★富澤充以先生講演会
- ・二月十七日
- ★飯田綾子先生講演会
- ・三月十七日

編集後記

コロナ禍への寄稿は悲喜こもごも。いつか思い出話になりますように…。(西村)
今年も行事が中止。穴埋めに会員全員に文章を依頼。この時代の一断面か。(原)
コロナを上手にさけて活動し、楽しめた。コロナはまだ居るぞ。負けないぞ。(森)
コロナについて、六十字以内の作文の無理なお願い。真摯に書いて頂き嬉し。(登坂)